

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0491300299		
法人名	医療法人一秀会		
事業所名	認知症高齢者グループホームコンフィアンサ ユニット:1階		
所在地	宮城県栗原市築館宮野中央一丁目16-13		
自己評価作成日	令和3年1月22	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護・福祉サービス非営利団体ネットワークみやぎ		
所在地	宮城県仙台市青葉区柏木一丁目2番45号 フォレスト仙台5階		
訪問調査日	2021年2月22日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍においてグループホームコンフィアンサに出来ることを模索している。少人数を活かし、家庭に近い環境になるように努めている。月行事を毎月催し、屋内でも四季を感じられるようにしている。また屋内外の環境整備にも努め全室、空調・洗面台・介護ベット・明るさ調整のできる照明を設置している。快適にゆっくりと過ごして頂けるように努めている。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

母体法人は、宮城県と岩手県に老人保健施設・有料老人ホームや在宅サービスなどを運営している。ホームは2017年に事業を開始し、県立築館高校近くの国道4号線から少し入った住宅地の一角にある2ユニットの木造2階建て造りである。周辺には商業施設、病院や薬局、郵便局などがあり利便性が高い。ホームの名前「コンフィアンサ」とは、スペイン語で「信頼」という意味があり、職員は利用者、家族、地域との信頼関係を築きながら、利用者が快適に暮らしていけるように支援している。理念は「その人らしい生活が継続されるようお手伝いします」「ぬくもりのある家庭的な場を提供します」「地域との交流を大切にします」を掲げている。利用者は、庭で花や野菜を育てたり、庭木の手入れもするなど、残存能力に合わせ職員と一緒に楽しんでいる。コロナ禍で外出を制限せざる負えないため、ホーム内でのイベントなどを工夫し充実させて対応している。管理者は、職員から意見を聞き運営やケアに活かすよう努め、また、資格取得についても受講しやすいよう配慮し支援している。

#### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる。 (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある。 (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている。 (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている。 (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者の意思を出来る限り尊重し、外出等の支援をする努力をしている。 (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、医療機関との連携や、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている。 (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている。 (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている。 (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている。 (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
66	職員は、やりがいと責任を持って働いている。 (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う。	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない

自己評価および外部評価結果（事業所名 認知症高齢者グループホームコンフィアンサ）「ユニット名 1階」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所時、職員間で話し合い作成した理念となっている。玄関ホールに掲示している。	年1回、事業所開設時に全職員で話し合い作った理念を全体会議で振り返り確認している。職員は理念を念頭に、利用者、家族、地域との交流を大切にし、利用者一人ひとりの尊厳を守り、希望が叶えられるよう努め支援している。理念は玄関や事務所にいつでも確認できるように掲示している。	全職員が理念を共有し実践に繋がっているか、改めて利用者・家族・地域のニーズ・事業所の変化に応じたものになっているか、振り返りの機会を持つことを期待する。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入している。台風等で地域住民が指導やパトロールに来てくれる。	自治会に加入し、総会や清掃活動に参加している。例年は、敬老会の案内があり参加したり、ホームの夏祭りに近隣住民が参加し交流していた。歌や踊りのボランティアの来訪もあり楽しんでた。コロナ禍で様々な交流が希薄になる中、職員が楽器の演奏をするなど、利用者が楽しめるよう工夫して取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現在、コロナ禍で行えていないが、学生の社会科学学習の受け入れなども検討している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回運営推進会議を開催していたが、現在、コロナの影響で開催できていない。	隔月、利用者、家族、自治会長、民生委員、市職員、地域包括職員、職員が参加し開催していた。運営状況やヒヤリハットなどを報告し、委員から意見・要望を聞き、情報交換をしていた。災害時の避難場所などについてのアドバイスがあり、改善に繋がった。コロナ禍により2月以降は開催できていない。	コロナ禍での開催は難しい状況ではあるが、文書による報告など代替えでできることを検討し、運営推進会議の早期開催を期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市職員に運営推進会議に参加してもらっている。その他、行政の支援が必要な利用者がある場合にも連絡を取り合っている。	市職員が運営推進会議を通してホームの実情を把握している。生活保護受給について相談したり、入居の可否の問い合わせがあるなど連携している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束ゼロの手引きを基本とし内部研修で身体拘束について考え学ぶ機会を設けている。	年2回、研修で身体拘束に関するガイドラインなどを学び、毎月のユニット会議で「身体拘束・虐待防止係」を中心に話し合い、身体拘束をしないケアに努めている。外出傾向が強い利用者には、散歩をしたりドライブをするなどで気分転換を図っている。玄関の施錠は19時から6時30分までで、日中は安全に配慮してセンサーを使用している。	身体拘束・虐待防止係を身体拘束廃止委員会として整備することを期待したい。
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待に対する内部研修会を行っている。	高齢者虐待防止関連法及び認知症ケアに関する研修を実施している。特にスピーチロックなどの言葉遣いに注意を払い、日常的に丁寧な言葉で対応するように努めている。職員の精神的な負担を減らし、働きやすいよう取り組み、定時帰宅、希望日で有給取得しリフレッシュが図れるようにしたり、ストレスを貯めないよう配慮している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	必要に応じてまもりーぶの活用を勧めたり検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書並びに重要事項説明書を用いて説明にあたっている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設置し、面接や電話等で要望があった際は出来る限り、反映できるよう努めている。	例年は運営推進会議に家族が参加していた。コロナ禍で面会を自粛しているため、電話で意見や要望を聞いている。「筋力低下により歩く機会が減っているが、本人は歩くことを望んでいる」「刻み食ではなく、普通食を食べたい」などの要望があり、検討しながらできるかぎり要望に応えている。毎月、「コンフィアンサ通信」と介護記録を送り、日々の暮らしを報告している。コロナ禍でも、家族からの意見を聞く機会を増やす取り組みを検討している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員から意見があった際は随時検討し反映できるように努めている。	職員から、全体会議、ユニット会議、面談などで意見を聞いている。ホーム内の掃除の時間や周辺の清掃、排泄や入浴時の二人体制など、出された意見を改善に繋げた。職員は「食事係」「身体拘束・虐待防止係」「行事係」「車両係」などの役割を分担し、責任をもって業務に取り組み、ケアの質の向上に繋げている。資格取得支援も行い、職場改善、働く意欲向上、スキルアップにも努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	前職歴や年齢なども考慮した給与等級となっている。		
13		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	認知症実践者研修、実務者研修等の外部研修に参加している。		
14	(9)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	外部研修への参加を通し、同業者との意見交換の機会を設けている。	コロナ禍以前は外部研修などに参加し、同業者との情報交換を行なえる機会を設けていた。研修で得た情報は、職員会議で周知し、より良いケアに繋げている。同法人の他の事業所と交流も行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者の主訴や意向を聞き取りプランに盛り込んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の主訴や意向を聞き取り支援に繋がるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	アセスメント、課題分析を通し何を必要としているのかの把握に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来ることや得意なことを行ってもらっている。食事は皆で食べている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の様子を介護記録や電話で報告している。家族の意向を聞きながら介護にあたっている。		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現在、コロナ禍で面会は行えていないが、電話のやり取りや年賀状を送ったり馴染みの関係が途切れないよう支援している。	コロナ禍で面会ができない中、家族や友人との馴染みの関係が途切れないよう、電話や手紙・年賀状などを通し、継続支援に努めている。現状を把握しながら、さらに馴染みの人、場との関係継続のための支援について模索している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う利用者同士の席や、協働して行う家事など関わり合いを持ちながら生活できるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現在は行えていない。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	課題分析、カンファレンス、本人との会話から得た情報を通して本人の思いや意向に近づけられるように努めている。	入浴時や居室などでの何気ない会話の中から、思いや意向を聞くことがある。業務日誌や申し送りを通し職員間で情報共有し、できるだけ叶えられるよう努めている。新聞の広告を見て、「ぶどう狩り」に行きたいという要望に応えたこともあった。意思表示が困難な利用者には、表情や仕草などから意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活歴や地域性を考え、本人のこれまでの暮らしを把握するように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	寝たきりであっても無理のない範囲で活動に参加してもらっている。本人のADLやIADLに合った支援になるよう努めている。		
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員間で意見を出し合いアセスメント課題分析を行いプランに反映できるようにしている。	毎月、モニタリングを実施しており、3ヶ月毎に利用者一人ひとりの状態を確認し、介護計画の評価を行っている。年1回、利用者、家族、医師から意見も聞き見直し、また、状態の変化に応じて随時、見直している。介護計画作成後は郵送し、家族から同意を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録に本人の様子を記載し一目で確認できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の買い物代行を行っている。コロナ以前は買い物に出掛けるなど外出の支援を行っていた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティア活用や市の健診への支援を行っている。		
30	(13)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人個々のかかりつけ医を入居後でも継続し受診できるようにしている。	利用者、家族が希望するかかりつけ医を受診している。通院は家族付き添いを基本とし、コロナ禍により現在は職員が同行している。受診結果は「受診記録」に記載し、職員間で情報共有し、家族に報告している。週1回、法人の看護師が来訪し、利用者の健康管理を行っている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同法人の看護師と連携し本人の体調管理に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	協力病院を委託契約している。利用者が入院した際には介護情報を提供し連携に努めている。		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重症化における対応に関わる指針を作成し入居時に説明している。	入居時に「利用者 重症化における対応に関わる指針」を説明し、同意を得ている。利用者や家族の希望に応じ、看取りを行う体制を構築しているが、看取りの実績は未だない。医療機関への入院などの選択肢についても説明し、連携が図れるようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変・事故マニュアルを作成している。夜間帯のオンコール体制を整備している。		
35	(15)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練の実施。台風発生時等の地域住民のパトロール支援を受けている。	火災・風水害・地震マニュアルが整備され、地域のハザードマップも活用している。避難訓練は年2回、内1回は地域住民が参加し夜間想定訓練を実施していたが、今年度は実施コロナ禍でできていない。状況を確認しながら、次年度4月に実施を予定している。設備点検は年2回、非常用食料は2日分備蓄している。コロナ感染予防策として、マスクや消毒液の確保、面会制限などを行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(16)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の性格に配慮し、その方に合った声掛けをするように努めている。	プライバシー保護や利用者の人格を尊重した支援を心掛けている。居室に入室の際はノックと声掛けで確認し、排泄介助はさりげなく行っている。スピーチロックに繋がるような「待っていて」「座っていて」などの声掛けをせず、「今いきますからね」など、利用者の立場に立った声掛けに努めている。呼び方は苗字に「さん」付けで呼んでおり、同じ苗字の人には名前で呼ぶこともある。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の希望を可能な限り表出できるような声掛けを行い、意思疎通が難しい方であっても選択できるような声掛けに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴時間や起床時間を本人に確認しながら介助にあたっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人に服を選んでもらっている。自ら選べない方は職員が季節感等を考慮し選んでいる。		
40	(17)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者と職員と一緒に食事を摂り、後片付けを協力して行っている。	ユニット毎、食事係がメニューを作り、食材の買い物をし、料理をしている。コロナ禍以前は外出を兼ねて利用者と一緒にしていた。旬の食材を取り入れたり、行事食などで季節を楽しめるよう配慮している。誕生日はケーキでお祝いし、利用者の楽しみになっている。年1回、法人の管理栄養士が確認しアドバイスを受けている。職員も一緒に食卓を囲み、利用者の好みや残量の把握に努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事形態の工夫、食事水分摂取量を記録している。おやつや補食を活用し栄養が摂れるように支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを行い誤嚥性肺炎の予防に努めている。義歯洗浄剤や口腔ケアスポンジを活用している。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(18)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	トイレ誘導し自然排便を促している。尿量や排尿間隔の把握にも努めている。	一人ひとりの排泄パターンを把握し、トイレ誘導を行い、できるだけトイレで排泄できるよう支援している。夜間はポータブルトイレや紙おむつを利用するなど、その人に合わせている。便秘対策として野菜ジュースや乳製品、オリゴ糖を摂ったり、訪問看護師に相談し、医師の処方薬を服用する人もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食品ではオリゴ糖や乳酸菌飲料などを提供し、下剤だけに頼らないようにしている。		
45	(19)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴時間を本人に確認し、お湯の温度も好みに合わせている。	週2回を基本に入浴を支援し、希望に応じて回数を増やすこともできる。湯は都度交換し、好みの湯温で、シャンプーやボディソープも利用者の好みのものを使用している。入浴拒否の人には、シャワー浴や足浴を勧め、そのまま入浴に繋げるなど工夫して清潔保持に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の希望で午睡してもらい、夜間は室温や照明にも配慮している。明るさを調整できる照明器具を設置している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ごとに薬剤情報をまとめ、すぐ確認できるようにしている。また看護職員や薬剤師の指導を受けている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の好きなことや得意なことをして過ごしてもらっている。家事の手伝い、塗り絵、音楽鑑賞等。また本人が楽しめそうなことは何か日常生活を通し考えている。		
49	(20)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ以前は個人や全体での外出の機会を設けていたが、現在は行っていない。	年間外出計画を立て、車いすの利用者と一緒に四季折々に合わせ外出を楽しんでいた。つるし雛や桜、あやめ、紅葉、ぶどう狩りなどを楽しんでいた。コロナ禍で外出の機会が限られ、利用者は感染予防を徹底し、近所を散歩したり、ドライブしたり、庭で花や野菜を育てたりしている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	日常生活で使用するお金を預り金として施設管理し、本人の希望があった際には買い物に出掛けたり代行している。また自分で金銭管理できる方にはしてもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族と自由に電話をしてもらっている。友人に年賀状を出す支援等を行っている。		
52	(21)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設内外の衛生管理に努めている。室内は明るさを調整できる照明器具を設置し、全室空調完備となっている。	リビングは明るく広々としている。六角形のテーブルとソファが置かれ、利用者が好きな場所でくつろげる空間になっている。時計やカレンダーは見やすく配置され、季節を感じる装飾もある。花も飾られ家庭的な雰囲気になるよう配慮している。冬場は加湿器が設置され、温・湿度管理は職員が行っている。コロナ禍で、定期的に換気と除菌・清掃を行い清潔な環境維持に努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブル席の工夫、ソファベットの配置により、できるだけゆったりと過ごせるようにしている。		
54	(22)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が自宅で使っていたものを持ってきてもらい、できるだけ自宅の自室に近い形になるように努めている。	居室にはエアコン、低床ベッド、カーテン、クローゼット、洗面台、煙感知器、スプリンクラーが備え付けてある。入口には花の名前が表示されている。利用者はテレビ、寝具、衣類や化粧品、碁盤、家族の写真など、思い思いの物を持ち込み、居心地の良い空間になっている。温・湿度は職員が管理し、掃除や整理整頓を職員と一緒にを行う利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	目印になるようなものの掲示、介護ベットや付随するL型の手すり、左右に移動できる浴槽等を設置し、本人の残存機能を使うように配慮している。		

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0491300299		
法人名	医療法人一秀会		
事業所名	認知症高齢者グループホームコンフィアンサ ユニット:2階		
所在地	宮城県栗原市築館宮野中央一丁目16-13		
自己評価作成日	令和3年1月25日	評価結果市町村受理日	

#### ※事業所の基本情報(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護・福祉サービス非営利団体ネットワークみやぎ		
所在地	宮城県仙台市青葉区柏木一丁目2番45号 フォレスト仙台5階		
訪問調査日	2021年2月22日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者職員との信頼関係を築いていけるよう、傾聴し寄り添った介護を心がけている。また、日常生活のなかで楽しみを持って暮らして頂けるように、季節感のある装飾、行事を企画、行事食やテイクアウトの提供、また健康を維持するために、軽体操、風船バレーを取り入れて活動している。家族との信頼関係を保ち、生活の様子等を電話でお知らせしている。また、住み慣れた地域で安心、安全に暮らしていけるように地域との交流を図るようにも努めている。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

母体法人は、宮城県と岩手県に老人保健施設・有料老人ホームや在宅サービスなどを運営している。ホームは2017年に事業を開始し、県立築館高校近くの国道4号線から少し入った住宅地の一角にある2ユニットの木造2階建て造りである。周辺には商業施設、病院や薬局、郵便局などがあり利便性が高い。ホームの名前「コンフィアンサ」とは、スペイン語で「信頼」という意味があり、職員は利用者、家族、地域との信頼関係を築きながら、利用者が快適に暮らしていけるように支援している。理念は「その人らしい生活が継続されるようお手伝いします」「ぬくもりのある家庭的な場を提供します」「地域との交流を大切にします」を掲げている。利用者は、庭で花や野菜を育てたり、庭木の手入れもするなど、残存能力に合わせ職員と一緒に楽しんでいる。コロナ禍で外出を制限せざる負えないため、ホーム内でのイベントなどを工夫し充実させて対応している。管理者は、職員から意見を聞き運営やケアに活かすよう努め、また、資格取得についても受講しやすいよう配慮し支援している。

### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる。 (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている。 (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある。 (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている。 (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている。 (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている。 (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている。 (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、やりがいと責任を持って働いている。 (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者の意思を出来る限り尊重し、外出等の支援をする努力をしている。 (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う。	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、医療機関との連携や、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている。 (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果（事業所名 認知症高齢者グループホームコンフィアンサ）「ユニット名 2階」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念については、常に事務所にて掲示し職員同士共有している。	年1回、事業所開設時に全職員で話し合い作った理念を全体会議で振り返り確認している。職員は理念を念頭に、利用者、家族、地域との交流を大切にし、利用者一人ひとりの尊厳を守り、希望が叶えられるよう努め支援している。理念は玄関や事務所にもいつでも確認できるように掲示している。	全職員が理念を共有し実践に繋がっているか、改めて利用者・家族・地域のニーズ・事業所の変化に応じたものになっているか、振り返りの機会を持つことを期待する。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年は、コロナ禍の中で地域との交流が出来なかった。	自治会に加入し、総会や清掃活動に参加している。例年は、敬老会の案内があり参加したり、ホームの夏祭りに近隣住民が参加し交流していた。歌や踊りのボランティアの来訪もあり楽しんでた。コロナ禍で様々な交流が希薄になる中、職員が楽器の演奏をするなど、利用者が楽しめるよう工夫して取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍の中で地域の人々に認知症の人の理解や支援方法を発信することが出来なかった。例年だと夏祭りで交流があった。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	令和2年度はコロナ禍の中で、開催が出来なかった。	隔月、利用者、家族、自治会長、民生委員、市職員、地域包括職員、職員が参加し開催していた。運営状況やヒヤリハットなどを報告し、委員から意見・要望を聞き、情報交換をしていた。災害時の避難場所などについてのアドバイスがあり、改善に繋がった。コロナ禍により2月以降は開催できていない。	コロナ禍での開催は難しい状況ではあるが、文書による報告など代替えでできることを検討し、運営推進会議の早期開催を期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	確認事項を電話にて聞いている。	市職員が運営推進会議を通してホームの実情を把握している。生活保護受給について相談したり、入居の可否の問い合わせがあるなど連携している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	内部研修にて身体拘束について勉強している。身体拘束はしないケアに取り組んでいる。	年2回、研修で身体拘束に関するガイドラインなどを学び、毎月のユニット会議で「身体拘束・虐待防止係」を中心に話し合い、身体拘束をしないケアに努めている。外出傾向が強い利用者には、散歩をしたりドライブをするなどで気分転換を図っている。玄関の施錠は19時から6時30分までで、日中は安全に配慮してセンサーを使用している。	身体拘束・虐待防止係を身体拘束廃止委員会として整備することを期待したい。
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止については全職員研修を受けている。事業所内では職員同士常に連携し防止に努めている。	高齢者虐待防止関連法及び認知症ケアに関する研修を実施している。特にスピーチロックなどの言葉遣いに注意を払い、日常的に丁寧な言葉で対応するように努めている。職員の精神的な負担を減らし、働きやすいよう取り組み、定時帰宅、希望日で有給取得しリフレッシュが図れるようにしたり、ストレスを貯めないよう配慮している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修等行い理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	詳細に説明し納得を得ている。また、質問、疑問についても家族には納得頂いている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の家族から意見や要望は受け入れている。	例年は運営推進会議に家族が参加していた。コロナ禍で面会を自粛しているため、電話で意見や要望を聞いている。「筋力低下により歩く機会が減っているが、本人は歩くことを望んでいる」「刻み食ではなく、普通食を食べたい」などの要望があり、検討しながらできるかぎり要望に応えている。毎月、「コンフィアンサ通信」と介護記録を送り、日々の暮らしを報告している。コロナ禍でも、家族からの意見を聞く機会を増やす取り組みを検討している。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	2か月に1回の全体会議や月1回のユニット会議にて、各職員意見や提案を聴く機会を設け、業務の見直し、改善を行い日々のサービス向上に努めている。	職員から、全体会議、ユニット会議、面談などで意見を聞いている。ホーム内の掃除の時間や周辺の清掃、排泄や入浴時の二人体制など、出された意見を改善に繋げた。職員は「食事係」「身体拘束・虐待防止係」「行事係」「車両係」などの役割を分担し、責任をもって業務に取り組み、ケアの質の向上に繋げている。資格取得支援も行い、職場改善、働く意欲向上、スキルアップにも努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	適正な人員配置により、年休の消化、残業を減らす取り組みをしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の資格取得に向けた取り組みを行っている。認知症実践者研修を受講し、資格を取得している。		
14	(9)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍の中、法人内の研修や外部研修が開催されなかった。	コロナ禍以前は外部研修などに参加し、同業者との情報交換を行なえる機会を設けていた。研修で得た情報は、職員会議で周知し、より良いケアに繋げている。同法人の他の事業所と交流も行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの開始の時は、実調にて生活歴、ADL、困っている事当細部に渡って共有し、職員で本人の意向もふまえて、より良い支援を提供している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	意見や要望を取り入れ、家族との関係性を築いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ケアプランという形で、今困っている事や、こうなりたいと言う事を引き出し、出来るように支援していく。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に洗濯物をたたんだり、食器を拭いたり配膳したりと、共に暮らす関係を築いている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で家族との面会が出来ないなかで、電話で日頃の様子をお伝えし、また、家族からの要望も取り入れ、家族と会えないが元気で生活出来るように支援している。		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が出来る事の継続と馴染みのものは、関係が続くように支援している。	コロナ禍で面会ができない中、家族や友人との馴染みの関係が途切れないよう、電話や手紙・年賀状などを通し、継続支援に努めている。現状を把握しながら、さらに馴染みの人、場との関係継続のための支援について模索している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う利用者様を隣席し、安心できるようにし、また、皆さんと一緒に活動できる風船パレーを取り入れています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所しても相談、援助は行う事を心がけている。次の施設への情報を伝えている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりに傾聴し、本人の希望、意向に寄り添うように努力している。	入浴時や居室などでの何気ない会話の中から、思いや意向を聞くことがある。業務日誌や申し送りを通し職員間で情報共有し、できるだけ叶えられるよう努めている。新聞の広告を見て、「ぶどう狩り」に行きたいという要望に応えたこともあった。意思表示が困難な利用者には、表情や仕草などから意向の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活歴や今まで培ってきた馴染みの暮らし方等を、把握しサービスにつなげている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	朝、夕の申し送りや、ケア記録を記入することで共有している。		
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族と本人の意向を伺うと共に、カンファレンス会議で本人の思いをそれぞれあげ、多く出た意見を元に介護計画を作成している。	毎月、モニタリングを実施しており、3ヶ月毎に利用者一人ひとりの状態を確認し、介護計画の評価を行っている。年1回、利用者、家族、医師から意見も聞き見直し、また、状態の変化に応じても随時、見直している。介護計画作成後は郵送し、家族から同意を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	状態が変わったときや、6カ月ごとにカンファレンス会議を行い、介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	月行事という形で、新年会、ひな祭り、クリスマス会等、テイクアウトをしてお寿司を食べたり、ゲームや誕生会等行っております。コロナ禍で外出は出来なかった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で地域資源を活用出来なかった。		
30	(13)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	コロナ禍で受診は職員対応としている。かかりつけ医には定期受診の他に急変時に対応して頂いたり、相談も出来ております。家族には、その都度報告の電話をしております。	利用者、家族が希望するかかりつけ医を受診している。通院は家族付き添いを基本とし、コロナ禍により現在は職員が同行している。受診結果は「受診記録」に記載し、職員間で情報共有し、家族に報告している。週1回、法人の看護師が来訪し、利用者の健康管理を行っている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携加算を算定しているため、週1回訪問看護師が健康観察を行い、報告、相談を行い個々の利用者が適切な看護を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	主治医やその看護師、地域医療連携室の相談員と情報交換や相談等連携を図っている。		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在重度化や終末期の方はいませんが、今後主治医、家族とも相談して、事業所で出来る看取りを説明していく。	入居時に「利用者 重症化における対応に関する指針」を説明し、同意を得ている。利用者や家族の希望に応じ、看取りを行う体制を構築しているが、看取りの実績は未だない。医療機関への入院などの選択肢についても説明し、連携が図れるようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	訓練は定期的に行ってはいない。急変時や事故発生時は速やかに救急搬送や緊急受診にて対応している。		
35	(15)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	ハザードマップを確認し、水害時は最悪の場合は4mとなるので、2階へ避難すること、火災や地震の時の訓練は定期に行う事と、全職員が利用者が安全に避難出来るように心の準備と訓練が大切です。地域の方とは協力体制はとれている。	火災・風水害・地震マニュアルが整備され、地域のハザードマップも活用している。避難訓練は年2回、内1回は地域住民が参加し夜間想定訓練を実施していたが、今年度は実施コロナ禍でできていない。状況を確認しながら、次年度4月に実施を予定している。設備点検は年2回、非常用食料は2日分備蓄している。コロナ感染予防策として、マスクや消毒液の確保、面会制限などを行っている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(16)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	常に個人の気持ちを大切にしており、その方にあった声かけで対応しております。失敗があった時は、他の人に気づかれないように、言葉を掛けて対応しております。	プライバシー保護や利用者の人格を尊重した支援を心掛けている。居室入室の際はノックと声掛けで確認し、排泄介助はさりげなく行っている。スピーチロックに繋がるような「待っていて」「座っていて」などの声掛けをせず、「今いきますからね」など、利用者の立場に立った声掛けに努めている。呼び方は苗字に「さん」付けで呼んでおり、同じ苗字の人には名前で呼ぶこともある。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の会話の中でこちらから、引き出していき出来る限り実現出来るように支援していく。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な生活リズムは崩さず、その日の体調に合わせて無理のない範囲で、その人の希望に沿うように支援しています。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に応じた服を着て頂き、入浴時やその日にどれを着たいか伺っています。起床時も整容の支援をしております。		
40	(17)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	その人の疾患、嚥下、歯の状態に合わせて食事形態を工夫して提供しております。盛り付け、片付け(食器拭き)も一緒に行っております。	ユニット毎、食事係がメニューを作り、食材の買い物をし、料理をしている。コロナ禍以前は外出を兼ねて利用者と一緒にいた。旬の食材を取り入れたり、行事食などで季節を楽しめるよう配慮している。誕生日はケーキでお祝いし、利用者の楽しみになっている。年1回、法人の管理栄養士が確認しアドバイスを受けている。職員も一緒に食卓を囲み、利用者の好みや残量の把握に努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの状態や食事量を把握して、手作りの栄養のある食事を提供しております。水分は時間を決めて提供している。また、一人で飲食出来ない方は一部介助にて支援しております。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	3食の食事の後に必ず口腔ケアを行っております。自分で出来る方は声掛け、確認を行い出来ない方は介助にて行っております。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(18)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	定期でのトイレ誘導や、一人ひとりの排泄パターンを把握し、動作を見逃がさないように誘導している。自分の出来るところはやって頂き、出来ない部分の支援を行っております。	一人ひとりの排泄パターンを把握し、トイレ誘導を行い、できるだけトイレで排泄できるよう支援している。夜間はポータブルトイレや紙おむつを利用するなど、その人に合わせている。便秘対策として野菜ジュースや乳製品、オリゴ糖を摂ったり、訪問看護師に相談し、医師の処方薬を服用する人もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘対策として牛乳や乳酸菌飲料、水分を定期的に補給している。医師の処方薬を服用している方もいる。		
45	(19)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	本人に必ず気持ちを確認してから入浴します。また、「今日お風呂に入りたい人」と、話す事があります。	週2回を基本に入浴を支援し、希望に応じて回数を増やすこともできる。湯は都度交換し、好みの湯温で、シャンプーやボディソープも利用者の好みのもを使用している。入浴拒否の人には、シャワー浴や足浴を勧め、そのまま入浴に繋げるなど工夫して清潔保持に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活パターンを把握して、休みたい時間には休んで頂くよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は、一人ひとりの薬の目的、副作用、用量について説明書を確認、指示通り服薬支援を行っている。また、症状の変化時は主治医、薬剤師等確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中で出来る家事(洗濯たたみ、食器拭き等)を行う事や、自分好きな歌謡曲や囲碁の雑誌、新聞をじっくり読んだり日々自分のペースで過ごす事が出来るように、支援している。		
49	(20)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在は外出を控えています。	年間外出計画を立て、車いすの利用者と一緒に四季折々に合わせ外出を楽しんでいた。つるし雛や桜、あやめ、紅葉、ぶどう狩りなどを楽しんでいた。コロナ禍で外出の機会が限られ、利用者は感染予防を徹底し、近所を散歩したり、ドライブしたり、庭で花や野菜を育てたりしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望に沿って買い物の代行を行っている。意思表示の難しい方は、職員が必要な物を買って代行している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	必要であれば、電話の取次ぎを行っている。コロナ禍で家族が手紙やはがきを送って来たのを何回も読み返しております。		
52	(21)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有部分の掃除や換気に気を配り、不快にならないように支援している。常に温度、湿度管理をしている。また、季節にあった飾り付けをリビングや居室前に行っている。	リビングは明るく広々としている。六角形のテーブルとソファが置かれ、利用者が好きな場所でくつろげる空間になっている。時計やカレンダーは見やすく配置され、季節を感じる装飾もある。花も飾られ家庭的な雰囲気になるよう配慮している。冬場は加湿器が設置され、温・湿度管理は職員が行っている。コロナ禍で、定期的に換気と除菌・清掃を行い清潔な環境維持に努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合う利用者様を隣席し、安心できるようにしていますが、コロナ禍の中でテーブルを放し対面にならないように配慮している。また、皆さんと一緒に活動できる風船バレーを取り入れています。		
54	(22)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	一人ひとりの生活歴に合わせて馴染みの物を持ってきて頂いております。家族写真やテレビ、収納ボックス等その方にあつたものを配置しております。	居室にはエアコン、低床ベッド、カーテン、クローゼット、洗面台、煙感知器、スプリンクラーが備え付けてある。入口には花の名前が表示されている。利用者はテレビ、寝具、衣類や化粧品、碁盤、家族の写真など、思い思いの物を持ち込み、居心地の良い空間になっている。温・湿度は職員が管理し、掃除や整理整頓を職員と一緒に利用も行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内は自由に使用して頂いております。常に介助が必要な方を除いては見守りのみ行い安全に生活して頂いております。トイレの入り口には大きくトイレと表示してあります。		